

## 第86回日本小児科学会茨城地方会

会長 右田 琢生 (筑波記念病院)  
期日 平成19年6月17日 (日)  
会場 つくば国際会議場 (つくば市)

### 1. 筑波大学における総合周産期母子医療センターの現状と課題

筑波大学小児科<sup>1)</sup>、同産婦人科<sup>2)</sup>

宮園 弥生<sup>1)</sup>、平木 彰佳<sup>1)</sup>、梶川 大吾<sup>1)</sup>、日高 大介<sup>1)</sup>、中尾 厚<sup>1)</sup>、齋藤 誠<sup>1)</sup>、鴨田 知博<sup>1)</sup>、小島 真奈<sup>2)</sup>、濱田 洋実<sup>2)</sup>

茨城県では2006年4月1日から周産期医療体制が再編され、筑波大学は総合周産期母子医療センターとしてつくば・県西地域を担うこととなった。センター発足前後の3年間(2004年~2006年)において、NICU/GCUへの入院数は138名(2004年)から214名(2006年)と激増したが、その一方で満床のため受け入れ不可能な症例数も増加しており、患者背景や人員の問題など、筑波大学の現状と今後の課題について検討し、報告する。

### 2. ガストログラフィン注入療法が有効と考えられた胎便関連性腸閉塞(MRI)の2症例

土浦協同病院新生児集中治療科<sup>1)</sup>、筑波大学小児外科<sup>2)</sup>

石黒 利佳<sup>1)</sup>、石井 卓<sup>1)</sup>、榎本 啓典<sup>1)</sup>、朝田 五郎<sup>1)</sup>、清水 純一<sup>1)</sup>、瓜田 泰久<sup>2)</sup>

当科において1991-2007年の過去17年間に10例のMRI症例を経験した。出生時週数は26-36週、出生時体重506-2374gで、グリセリン浣腸のみで改善した症例が3例、洗腸を先行した4例を含む7例にガストログラフィン注腸を施行した。最近の2例ではガストログラフィン注腸に加えガストログラフィン胃注入を行ない改善を認めたので報告する。

### 3. 高用量のオクトレオチドが著効した先天性乳糜胸の一例

筑波大学小児科<sup>1)</sup>、同産婦人科<sup>2)</sup>

梶川 大悟<sup>1)</sup>、平木 彰佳<sup>1)</sup>、日高 大介<sup>1)</sup>、中尾 厚<sup>1)</sup>、齋藤 誠<sup>1)</sup>、宮園 弥生<sup>1)</sup>、鴨田 知博<sup>1)</sup>、小島 真奈<sup>2)</sup>、濱田 洋実<sup>2)</sup>

先天性乳糜胸は、リンパ管の形成異常により発症すると言われている難治性の疾患で、これまで様々な治療法が試みられているが、確立したものはない。その中でもオクトレオチド療法は比較的行われている治療であるが、用量は文献により、かなりの差を認めている。今回、我々は低用量のオクトレオチドで効果を認めず、高用量(20 $\mu$ g/kg/hr)にして、初めて、効果が認められた症例を経験したので報告する。

### 4. ソタロールの経母体投与が有効であった胎児上室性頻拍症の3例

筑波大学小児科<sup>1)</sup>、同産婦人科<sup>2)</sup>

鈴木 悠介<sup>1)</sup>、加藤 愛章<sup>1)</sup>、高橋 実穂<sup>1)</sup>、斉藤 誠<sup>1)</sup>、宮園 弥生<sup>1)</sup>、中村 佳子<sup>2)</sup>、濱田 洋実<sup>2)</sup>、堀米 仁志<sup>1)</sup>

従来、胎児上室性頻拍症に対してジゴキシンの経母体投与が第一選択として行われてきたが、近年、心房粗動や long RP 頻拍に対するソタロールの有効性が報告されている。上室性頻拍症(心拍数 195-240 回/分)を呈した在胎 29-33 週の胎児 3 例に対し、母体内服によるソタロール投与を行った結果、3 例とも頻拍は停止し、早期分娩を免れることができた。胎児心エコーや胎児心磁図による頻拍症のタイプ診断により、適切な治療薬の選択が可能となる。

## 5. NICUに入院しない院内出生新生児への母乳育児支援に果たす医師の役割

川口市立医療センター新生児集中治療科

谷口 裕子、佐久間理奈、箕面寄至宏、中島 範子、山口 直人、松原 洋平、中島 啓介、森丘千夏子、奥 起久子

NICUに入院するほどではない低出生体重児に対する母乳育児支援には医師の適切な介入が必要といわれている。当院では低出生体重児の母乳育児支援について、入院中は毎日、退院後 1 週間健診、1 ヶ月健診という形で関与している。小児科医の関与しない正常新生児の場合と、母乳利用率そのほかの因子に関して比較検討して報告する。

## 6. 細菌性心外膜炎の 1 乳児例

茨城県立こども病院小児科<sup>1)</sup>、同心臓血管外科<sup>2)</sup>、日立製作所水戸総合病院小児科<sup>3)</sup>

菊地 斉<sup>1)</sup>、村上 卓<sup>1)</sup>、塩野 淳子<sup>1)</sup>、土田 昌宏<sup>1)</sup>、坂 有希子<sup>2)</sup>、金本 真也<sup>2)</sup>、五味 聖吾<sup>2)</sup>、阿部 正一<sup>2)</sup>、田村 優実<sup>3)</sup>、泉 維昌<sup>3)</sup>

心タンポナーデで発見された細菌性心外膜炎の 1 乳児例を経験した。症例は 6 か月の女児で基礎疾患はなかった。感冒症状から 4 日後に呼吸障害を呈し、著明な心嚢液の貯留が認められた。心嚢穿刺、外科的心嚢ドレナージを行った。血液培養からインフルエンザ桿菌が検出され、抗生剤投与を行った。その後の経過は良好である。細菌性心外膜炎は極めて稀であり、劇的な経過をとることも多い。早期診断・治療の重要性について報告する。

## 7. 興味深い経過をたどった遺伝性球状赤血球症の 9 歳女児例

取手協同病院小児科

伊集加奈子、能勢統一郎、松本 暁子、寺内真理子、長妻美沙子、鈴木奈都子、太田 正康

6 歳時に感冒にて当院を受診し、赤血球形態から遺伝性球状赤血球症が疑われた。溶血発作や胆石の合併もなく経過していた。2006 年 12 月、胃腸炎を繰り返し、その後腹痛が増強した。血液検査にて高度な黄疸および肝機能障害をみとめたが、エコー上胆石は認めず、多量の胆泥が総胆管内に貯留していた。内科的治療で症状は軽快したが、退院後胆石が確認された。その後、胆嚢炎や胆石発作を繰り返し、外科的治療を必要とした。

## 8. 急速に進行する骨破壊像を呈した B 前駆細胞性急性リンパ性白血病(ALL)の一例

茨城県立こども病院小児科<sup>1)</sup>、同放射線科<sup>2)</sup>、取手協同病院小児科<sup>3)</sup>、千葉県こども病院<sup>4)</sup>  
鈴木 涼子<sup>1)</sup>、小林 千恵<sup>1)</sup>、小池 和俊<sup>1)</sup>、加藤 啓輔<sup>1)</sup>、田草川彩子<sup>1)</sup>、中島 啓介<sup>3)</sup>  
太田 正康<sup>3)</sup>、沖本 由理<sup>4)</sup>、河野 達夫<sup>2)</sup>、土田 昌宏<sup>1)</sup>

4歳女児。右大腿部痛と発熱を主訴に近医入院。症状出現第5病日にMRIで右大腿骨遠位部に造影 T1WI 高信号域を認め骨髓炎と診断。第15病日に単純写真で骨皮質断裂像を認めた。3か月間の抗生剤投与をしたが疼痛部位は移動し症状は持続した。骨生検・骨髓穿刺でALL(白血球数4,000/ $\mu$ l、高二倍体、CD10・CD19陽性)と診断し、標準リスク群の化学療法を開始した。これまでの報告として骨破壊像があり骨髓炎治療を受けたALL症例は報告されているが、本症例のように数日での骨破壊を伴う例は稀である。文献的報告を加えて考察する。

## 9. マムシ咬傷の一女兒例

日立製作所日立総合病院小児科<sup>1)</sup>、同整形外科<sup>2)</sup>、同皮膚科<sup>3)</sup>  
福島 紘子<sup>1)</sup>、小林可奈子<sup>1)</sup>、諏訪部徳芳<sup>1)</sup>、村長 靖<sup>1)</sup>、菊地 正広<sup>1)</sup>、高本 康史<sup>2)</sup>、  
伊藤 周作<sup>3)</sup>

今回我々はマムシ咬傷の1例を経験したので報告する。症例は7歳女児。山でマムシに遭遇し左手第3指を受傷した。受傷後約1時間で当院を受診したが患部の腫脹強く直ちに減張切開術を施行した。同日抗マムシ毒素の投与を行い徐々に局所症状は軽快し受傷第21日目に退院した。日本では年間約1000-2000例がマムシにより受傷し10-20名が死亡している。小児では重症化しやすく報告のほとんどがGradeIV以上である。

## 10. メチルマロン酸血症のタンデム・マススクリーニング陽性例

国立成育医療センター遺伝診療科<sup>1)</sup>、茨城県立こども病院小児科<sup>2)</sup>  
右田 王介<sup>1)</sup>、田中 藤樹<sup>1)</sup>、後藤 昌英<sup>2)</sup>、山岡 明子<sup>2)</sup>、直井 高歩<sup>2)</sup>、森山 信子<sup>2)</sup>、  
柏木 玲一<sup>2)</sup>、奥山 虎之<sup>1)</sup>

呼吸障害・意識障害をともなう初回発作のあったメチルマロン酸血症10か月の男児、茨城県立こども病院の速やかな対応と診断により、救命された症例である。その後、肝臓移植の検討のため成育医療センターに紹介されたが内科的治療により小康を得て、現在経過観察中である。本児の出生直後、代謝性アシドーシスの発作急性期、間欠期のろ紙血を得て、タンデムマス法によるアシルカルニチン解析を施行し、出生直後にスクリーニング陽性となっていたことがレトロスペクティブに判明した。新生児タンデムマススクリーニング検査は児のQOL向上に有用であり、現在全国展開へ整備中である。

## 11. 行方市における5歳児健診

なめがた地域総合病院小児科

鈴木 直光、太田 哲也、伊藤 泰明、箱岩 沙織

乳幼児健診は3歳児健診を過ぎると就学児健診まで行なわれていないのが現状である。

一般に保育所や幼稚園など集団に入るのは3歳以降が多く、軽度発達障害児など集団に入って初めて異常に気づかれるケースが県の発達相談や病院専門外来に多く来ている。就学児健診でわかっていても対応が遅れるため教育現場で混乱がみられている。そこで行方市では平成18年度から5歳児健診を開始することにより早期支援を試みた。昨年度の最終受診率は90%で、多動や発達障害以外に肥満や視力異常で要観察の児が多くみられた。

## 12. 茨城県における小児糖尿病の疫学 — 学校尿検査による糖尿病検診12年間の結果の分析 —

平野こどもクリニック、腎臓病・小児糖尿病検診委員会、茨城県学校保健会、茨城県医師会

平野岳毅

茨城県内の公立小中高の約40万人の児童を対象にした糖尿病検診の過去12年の成績を分析した。1型糖尿病の有病率（人口1万比）は平成6年の0.9から平成18年の2.5と増加している。男女別では共に増加しているが、女児の方が増加は著しい。しかし人口10万比の発症頻度では1から3の間で推移し一定の傾向は見られない。2型では有病率、発生頻度共に増加傾向にはあるが、1型よりは低い。2型は治療で軽快するために正確な動向は把握しにくい。

## 13. 当院で過去11年間に経験した細菌性髄膜炎についての臨床的検討

土浦協同病院小児科

島田衣里子、梶川 優介、稲垣 健悟、白井謙太郎、滝沢 文彦、細川 奨、黒澤 信行、渡辺 章充、渡部 誠一

細菌性髄膜炎は最も重篤な細菌感染症の一つで、適切な抗菌療法を行っても10~20%の神経学的後遺症を生じ、死亡率は数%とされていることから、その診断・治療について現在もさまざまな検討がされている。今回われわれは1996年から2007年6月までの12年間のあいだに当院で経験した細菌性髄膜炎27例について、より適切な治療を行っていくため、その経過に関わる様々な因子について臨床的検討を行ったので報告する。

## 14. 2006/2007年シーズンの土浦市4小学校におけるインフルエンザ流行状況の調査並びにワクチン有効率の検討

国立霞ヶ浦医療センター小児科

山口 真也、馬場 一徳

H16年冬から行っている土浦市小学校におけるインフルエンザアンケート調査をH18年も行った。対象は4校2574名で、ワクチン接種率は平均44.8%、A型の発病率は全体で5.2%、B型は11.7%であった。ワクチンの粗有効率はA型20%（-11%~43%）、B型2%（-21%~21%）と有意な結果を認めなかった。流行前半のみを対象とした解析では、A型に46%（2-70%）の有効率を認めた。

## 15. 異常行動・精神症状を呈したインフルエンザB男児2例

茨城西南医療センター小児科

吉松 昌司、西村 一記、長谷川 誠

症例1は14歳男児。他院にてインフルエンザBと診断され、タミフル初回内服約3時間半後に不穏状態を呈し、当院を受診した。症例2は、13歳男児。他院にてインフルエンザBと診断され、タミフルは処方されなかった。第6病日に解熱したが、非常に強い傾眠傾向と意味不明な言動を繰り返すため、当院を受診した。2症例を比較し、インフルエンザに伴う精神症状について考察を加える。

## 16. インフルエンザ脳症の後遺症として経過観察されていたもやもや病の一例

総合病院取手協同病院小児科

太田 正康、能勢統一郎、松本 暁子、伊集加奈子、寺内真理子、長妻美沙子、鈴木奈都子

発症時7歳の女児。インフルエンザに伴って一過性の意識混濁をきたし、脳波で基礎活動の著明な徐波化が認められたためインフルエンザ脳症と診断した。以後、脳波の徐波化が持続し、インフルエンザ脳症の後遺症として経過観察を行っていた。しかし後になって2歳頃より頭痛発作があることや不随意運動の既往が判明したため10歳になって診断を再検討し、もやもや病の診断に至った。本症例の診断の困難さについて考察し、報告する。

## 17. West 症候群を合併した Shwachman-Diamond 症候群の一例

筑波大学小児科<sup>1)</sup>、茨城県立こども病院新生児科<sup>2)</sup>

吉見 愛<sup>1)</sup>、片山暢子<sup>2)</sup>、田中竜太<sup>1)</sup>、大戸達之<sup>1)</sup>、工藤寿子<sup>1)</sup>、鴨田知博<sup>1)</sup>

1歳男児。膵外分泌機能異常、精神運動発達遅滞、骨格異常、SBDS 遺伝子変異から Shwachman-Diamond 症候群と診断された。11ヶ月時よりシリーズを形成する tonic spasms がみられ、脳波上ヒプスアリスミアがあり、West 症候群の合併と診断された。Shwachman-Diamond 症候群は肝機能障害、好中球減少症などを呈し、有効な治療法が限られる点で苦慮したため報告する。

## 18. 選択性緘黙に神経性食欲不振を合併した1女児例

筑波学園病院小児科

仁井 純子、尾崎 俊介、牧 たか子、柴崎佳代子、藤田 光江

選択性緘黙とは話し言葉を理解し、話す能力があるのに、学校を含む1つ、または多数の主要な社会的状況において話すことを持続的に拒否する精神障害である。我々は小学5年で選択性緘黙を発症し、中学1年で摂食障害を来たした1女児例を経験した。行動療法を中心とした58日間の入院治療において、目標体重には達したが、医療スタッフに対する緘黙は持続した。文献的考察を加えて報告する。